

^{いのち}
命をつなぐ
セラピー^{もの}ドッグ^{がたり}物語
^{めいけん}名犬チロリ^{なかま}とその仲間たち

^{おお き}
大木トオル／文



講談社 青い鳥文庫



す いぬ にっぽんはつ
捨て犬から、日本初のセラピードッグとなったチロリ。
ふか あいじょう ひと ゆう き き ぼう
深い愛情で、たくさんの人に勇気と希望をもたらしました。



いりょう かい ご げん ぼ かんじゃ こうれいしゃ
 医療や介護の現場で患者や高齢者に
 寄りそい、心身のケアにあたります。
 いぬ ふ あ えがお
 犬と触れ合うことで、みんなが笑顔
 に。





セラピードッグになるまでには、45^{きょう か}教科を2^{ねん い じょう}年以上かけて^{まな}学んでいきます。
^{ひと ひだりがわ}人の左側について、^{ある そく ど あ}歩く速度に合わせるのが基本です。^{き ほん}



ひがしにほんだいいしんさい ひさいち おとず かつどう つづ
 東日本大震災では、被災地を訪れて活動を続けました。
 か こうりゆう
 コロナ禍では、オンラインでの交流も。

日本初の
セラピードッグ
「チロリ」
.....
11

東日本大震災で
被災地支援にあたった
「ピース」
.....
57

目次

はじめに
.....
8



だい
第

5

しゅう
章

コロナ禍で
捨てられた秋田犬
「ルーシー」

183

だい
第

4

しゅう
章

野犬から
生まれ変わった
「ゆきのすけ」

149

だい
第

3

しゅう
章

「幸」と「福」……
福島で救出された
被災犬たち

97



はじめに

たくさんのお年寄りとしよが輪わになつて座すわっている部屋へやに、十頭とほどの犬いぬがハンドラーに連れられて入はいつてきました。胸むねを張はつて歩いてきたのは、セラピードッグたち。これからお年寄りとしよの中なかに入はいつて触ふれ合あつたり、リハビリなどのお手伝てつだいをするのです。どの犬いぬも「がんばつてお仕事しごとしよう」と張り切きっています。

これは「動物介在療法どうぶつかいざいりょうほう」と呼ばれ、医師いしと協力きやうりよくし、治療ちりょうとして病院びやういんや高齢者施設こうれいしやしせつなどで行おこなわれるものです。

犬たちいぬはみんなお行儀ぎよぎよく、同じ速はやさでトコトコきれいな列れつを作つくつて進すすみます。でも、なんだかちよつとユニーク。よく見みると、小さい犬ちいやどっしりした犬いぬがいて、大きさがまちまちな雑種ざっしゆばかりなのです。盲導犬もうどうけんや警察犬けいさつけんなどといった働く犬はたらは、血統けつとう書付きしよつの純血種じゅんけつしゆがなるのがふつうなのに、どうしてでしょう？

それは、もともとこの犬たちが飼い主から捨てられたり災害で飼い主をなくしたりして、行き場を失った犬だったからです。助けられてから訓練を受け、今は立派なセラピードッグとなつて、困っている人たちの役に立っています。つらい体験をし、悲しい思いを乗り越えてきたからこそ、犬たちは苦しんでいる人たちの心に寄りそい、支えることができるのです。

どんな生まれでも苦しいことがあつても、環境が変わつて教育を受けることで、よい生き方ができるようになる。

つらくても、生きることをあきらめてはいけない。

命を精一杯生きよう。

この犬たちは、それを私たちに教えてくれます。

これからお話するのは、そんな犬たちの物語です。

だい
第

1

しょう
章

にっ ほん はつ
日本初の
セラピードッグ
「チロリ」



セラピードッグが引き出す生きる力

車いすに座ったおじいさんは、もう何年も寝たきりで、歩く意欲をすっかりなくしていました。車いすのかたわらには、白い犬が寄りそっています。ずんぐりとした体に短い脚。左の耳は折れ曲がり、後ろ脚に障がいがあるため横座りしています。なんとも不格好な犬です。緑色のベストを着ているその白い犬は、チロリという名前でした。

でも、その瞳のなんて美しいこと！ 白いまつ毛に縁どられた真っ黒な大きな瞳で、チロリはおじいさんを力強く見つめます。その目は、こう言っているようにでした。

（さあ、おじいさん、歩きましょう。わたしと一緒に、ゆつくりと……。）
おじいさんは、恐るおそる立ち上がろうとしました。脚はガクガクと震え「ムリ

だ。」とつぶやきました。チロリはあきらめません。おじいさんをうるんだ瞳で見上げつけます。するとおじいさんはチロリの顔をもう一度見て、力を振りしぼって立ち上がったのです。そばで見守る家族やスタッフたちは、みな息をのみました。

つんのめるように、震える脚を前に出します。チロリはおじいさんの半歩先に進み、うながすように振り向きます。チロリのリーシ（人と犬をつなぐひも）を握る私とスタッフに抱きかかえられながら、おじいさんは一歩ずつ歩き出しました。まわりの人たちは、この奇跡のようなできごと思わず拍手を送りました。

誰よりも一番驚いたのは、おじいさん自身だったでしょう。目に涙をいっぱい浮かべて、

「チロちゃん、チロちゃん。」

と呼ぶのです。チロリは、シッポを大きく振って応えます。

チロリが着ている緑色のベストは、病気の人の治療を助ける「セラピードッグ」の証しです。そして、私はチロリたちセラピードッグを育て、多くの人たちに届ける活

動どうをしているのです。

寝ねたきりのおじいさんがチロリの励はげましで歩あるくように

おじいさんは、長谷川外吉はせがわそときちさんといいました。東京・日本橋人形町とうきょう・にほんばしにんぎょうまちで洋食屋ようしょくやを営いとなみ、町の名物シエフまちのめいぶつとして活躍かつやくしていた人ひとです。八十六歳さいで引退いんたいし、二〇〇一年ねん、八十八歳さいのときに高齢者施設こうれいしやしせつに入所にゅうしょ。そのころにはアルツハイマー型認知症がたにんちしやうのため、家族ぞくの顔かおもわからなくなっていました。介護認定かいごにんていは、要介護五ようかいご。失語症しつごしやうもあり、ほとんど寝たきりで、日常生活にちじふせいかつすべてに介助かいじよが必要ひつような状態じやうたいでした。

ある日ひ、長谷川はせがわさんの娘むすめさんが私わたしのもとを訪ねてきました。

「父ちちは昔むかしのことを忘れわすれ、言葉ことばを話すこともできません。犬いぬが大好きだいすでしたから、犬いぬに会あえば何かなにを思い出おもして話はなせるようになるかもしれないと思うおもうのです。」

娘さんむすめはセラピードッグセラピーどぐを高齢者施設こうれいしやしせつに連つれてきて会あわせてほしい、と頼たのみます。

そのころ私は、セラピードッグを育てて、その魅力を日本に広める活動を始めたいところでした。

私はさつそくチロリを施設に連れていきました。ところが、車いすの長谷川さんにチロリを会わせても、無表情で目の前に犬がいることすらわかりません。

「チロちゃんですよ、呼んであげてください。」

と私が伝えます。まず犬に声をかけたいという気持ちを持つてもらうためです。やがて何度も施設を訪れているうちに、長谷川さんが、

「めんどくせーなー。」

と言ったのです。下町のおじいちゃんらしい、ぶっきらぼうな言葉です。でも、そばにいた家族は、長谷川さんが声を出せたことに驚きました。やがて長谷川さんはうつろだった目をチロリに向け、チロリの名前を呼び、話しかけるようになっていきました。

「おれ、ビーフカツレツを作るのがうまいんだよ。」

洋食屋で活躍していたころのことを、チロリに自慢します。

（わあ、そうなんですね。もつと聞かせて。）

チロリは大きな瞳で見つめ、長谷川さんが少しずつ思い出して語り始めるのをじつと待ちます。寝たきりだったおじいさんが、話ができるまでになつて——。長谷川さんの姿を見て、家族がそばでうれし泣きしています。

やがて長谷川さんは、手を伸ばしてチロリの頭をなでるようになりました。柔らかなふさふさした毛に触れると、昔の犬好きだった自分を思い出したのでしよう。頭をなでる、抱きしめる。そう繰り返し返す長谷川さんを見ているうちに、私は「ひよつとしたら、歩けるのではないか」と思うようになりました。私は、長谷川さんを励ました。

「チロリと一緒に歩けるかもしれませんよ。さあ、私の手につかまって。」
そうして長谷川さんは車いすから立ち上がり、ふたたび歩けるようになったのです。



た あ ある だ は せ がわそときち
立ち上がって歩き出す長谷川外吉さん。

医療^{いりよう}だけでは救^{すく}えないものがあるのです。それは「人^{ひと}の心^{こころ}」です。チロリは長谷川^{はせがわ}さんに寄^よりそうことで、長谷川^{はせがわ}さんの心^{こころ}に「生きようとする灯^ひ」をともしたのです。

動物介在療法^{どうぶつかいざいりょうほう}と動物介在活動^{どうぶつかいざいかつどう}

チロリは、長谷川^{はせがわ}さんを励^{はげ}まして生きる力^{ちから}を呼^よびもどしました。このようなセラピー^{セラピー}ドッグの働^{はたら}きは「動物介在療法^{どうぶつかいざいりょうほう} (AAT / Animal Assisted Therapy)」とい^いい、医療現場^{いりようげんば}で動物^{どうぶつ}を介^{かい}して行^{おこな}う「治療^{ちりょう}」であり、医療^{いりよう}の一環^{いつかん}として行^{おこな}われます。セラピー^{セラピー}ドッグは、高齢者^{こうれいしや}や障^{しょう}がい者^{しや}、精神治療^{せいしんちりょう}やリハビリ^{リハビリ}を必要^{ひつよう}とする人^{ひと}がいる医療^{いりよう}の現場^{げんば}で、医師^{いし}と医学^{いがく}に基^{もと}づいたプログラム^{プログラム}を組^くんで人^{ひと}の病氣^{びやうき}の治療^{ちりょう}を助^{たす}け、健康^{けんこう}を促^{そく}進^{しん}する役^{やく}目^めを担^{にな}う犬^{いぬ}です。一定^{いってい}のレベル^{レベル}の教育^{きよういく}を受けたハンドラー^{ハンドラー}（セラピー^{セラピー}ドッグ^{ドッグ}の教育^{きよういく}・指導員^{しどういん}）のもとで、しっかりと教育^{きよういく}を受^うけた犬^{いぬ}がセラピー^{セラピー}ドッグ^{ドッグ}になります。

動物介在療法は、一九七〇年代に欧米で始まった社会科学的思想からスタートしました。人と動物とがたがいに作用しあうことで、人の心身の健康を支えようというものです。同時期に、アメリカでは獣医師や精神科医たちが中心となつて組織的に研究と実践が行われるようになりました。

もう少しわかりやすく言いましょう。たとえば、お年寄りや病気をしたあとの人が体を回復させるためにリハビリを行うのは、痛くてつらいので嫌なものです。でも犬がいると、なでたり抱きしめたり、一緒に歩きたいと思うため、自然に楽しくリハビリに取り組めるようになります。

麻布大学の研究によると、人と犬が見つめ合うと、脳の中でオキシトシンというホルモンが三倍も増え、ストレスが減つて前向きな気持ちになるといいます。気持ちが明るくなつて延命にもつながるのです。

いっぽう、「動物介在活動 (AAA / Animal Assisted Activity)」も知られています。こちらは動物と触れ合うことを楽しみ、リラクセスしたり生活の質の向上を目的

とした活動かつどうです。

ゴミ置き場の捨て犬「チロリ」

チロリの大きな瞳ひとみで見つめられると、誰もが頭あたまをなでて声をかけたくなくなります。そうやって、チロリはたくさんのお年寄りとしよや障がいのある人ひとたちを励まし、愛あいされてきました。つらい思いをしている人ひとに寄りそうことができる犬いぬだったのです。

なぜ、どこにでもいるような雑種ざつしゅの犬いぬが、そんなやさしさを持てたのでしょうか。それは、チロリ自身じしんがたくさんのつらい経験けいけんをしてきたからかもしれません。

チロリは、ゴミ置き場おみおきばに捨てられた犬いぬでした。かたわらには子犬こいぬが五匹ひき。子犬こいぬを産うんだ母犬ははいぬごと、段ボール箱だんぼるばこに入れて捨てられたのです。母犬ははいぬはゴミ置き場おみおきばの水道すいどうの蛇じゃ口ぐちにたまった水みずを飲んで飢えうをしのいでいたようです。

一九九二年夏、ぐうぜん通りかかった私は、子どもたちが犬の世話をしているのに気づきました。かわいそうに思った近所の子どもたちが、段ボール箱ごと母犬と子犬たちをゴミ置き場から建物の跡地にこっそり移して、エサをあげていたのです。

世話をしていた子どもうちのひとりの女の子が、

「お母さん犬には、チロリという名前をつけたの。」

と、私に教えてくれました。

チロリは泥で茶色く汚れているうえに、傷だらけです。ぼろぼろの首輪が首に食いこみ、左の耳が折れ、後ろ脚にも障がいがありました。

「なんて不憫な犬なんだろう。」

私は哀れに思いました。

あらためて建物跡を眺め、私はハツとしました。そこは、私が二十代の初めごろに結核で二年半も療養していた国立療養所松戸病院（当時）の跡地だったのです。結核は一九五〇年までは日本人の死因の第一位を占める病気でした。その後、治療薬の開

はつ
発によつて死亡者数は減少しますが、私が入院療養をしていた一九七四年には、まだ
多おほくの患者がいて恐ろしい病氣だつたのです。もしかすると、私も命を落としていた
かもしれません。

何かに導かれたように、私の心に「この犬たちを助けなければならない」という思
いがよぎりました。

まずは五匹の子犬たちを引き取ってくれる人を探すのが先決です。仕事を持つてい
る私は「里親を探しています」という貼り紙をして、子どもたちに世話を頼み、とき
どき様子を見に来ることにしました。

私自身も心あたりに電話をして里親を探し、じきに四匹の子犬の貰い手が見つかり
ました。もう少し、と思った矢先に、子犬を一匹残したままチロリの姿がみあたらな
くなりました。子どもたちに聞くと、三、四日前からいなくなつたといいます。

私は胸騒ぎがしました。チロリは捕獲されてしまつたのではないだろうか、と……。

チロリを殺処分場から救出

市役所に問い合わせると、「近所の人からの通報があり、チロリらしい犬を捕獲して動物愛護センターに送った。」といひます。すぐに動物愛護センターに電話をしましたが、開庁時間が過ぎていたために誰も出ません。もし四日前に捕まったらすると、今日は五日目です。この動物愛護センターでは、捕獲した犬が五日間たつても飼主が引き取りに来なければ、翌朝にはガス室に送って殺処分してしまうのです。タクシーに飛び乗って動物愛護センターに行くと、門が閉まっています。私は夢中で塀を乗り越えて、敷地内に入りました。そして、

「この中に私の犬がいます。明日の朝、かならず引き取りに来ます」

と紙に大きく書き、扉や建物に何枚も貼り付けました。

翌日の朝早く、私は動物愛護センターに向かいました。一番奥の五日目の部屋の中

の、大型犬おおがたけんの群れむの後ろうしに折れた左耳ひだりみみが見えます。

「チロリー！」

名前なまえを呼ぶよと、ほかの犬たちいぬをかき分けるようにして、チロリーが前まえに出てきまし
た。でも、一瞬いつしゆん不思議ふしぎそうな表情ひょうじようをします。

（ときどき来てくれた人ひとだわ……。でも、なぜここにいるの？）

それはそうでしょう、ときおりご飯はんをくれたくらいのおじさんが迎えむかに来たのす
から。そのやりとりを見ていた職員しやくいんは、

「あなたの犬いぬですか？」

と、確認かくにんしました。私はあわてて、

「そうです。」

とはつきり答えこたえました。職員しやくいんは「いいんですね。」と言いいながら、チロリーを引き渡わたし
てくれました。

部屋へやを出でようとしたとき、チロリーはちよつと立ち止どまって、振り返かえりました。そし

て、一緒の部屋にいた犬たちをじっと見つめたのです。残される犬たちもチロリを

黙って見つめていました。

私は心の中で手を合わせることでできませんでした。

シャンプーの泡から出てきたのは真っ白な美しい犬

動物愛護センターから救出したチロリを抱いて、私はタクシーに乗りました。チロリは私の腕の中で激しく震えつづけていました。よほど動物愛護センターでの数日間が恐ろしかったのにちがいません。それに、なんともいえないひどい臭いがします。もともとの体の汚れのうえに、動物愛護センターの糞尿と消毒液、死臭が体に染みついていのです。

私はまず自分のケネル（犬舎）に連れて行って、シャンプーしました。こびりついた汚れはなかなか落ちません。もう一度シャンプーすると、茶色い犬だとはかり

おも
思つていたチロリは、なんと真つ白な美しい犬だったのです。まるで姿を変えるおと
ぎ話のお姫さまのように……。 ばなし ひめ

（温かい……、なんて気持ちいいの……。） あたた きも

チロリの震えが止まり、シッポを少しだけ振りました。 ふる と すこ

最後まで一緒にいた子犬はレオと名づけられ、一足先にケネルで保護していまし
た。やがてレオも里親が決まり、母親のチロリと別れることになりました。別れの
日、チロリは悲しそうに鳴いてレオのそばからなかなか離れようとしませんでした。
のちのことになります。が、別れの日から十三年後、母と息子は再会することができた
のです。なんとレオは、若いころのチロリと瓜ふたつでした。 かな こいぬ ははおや き はおや わか ひ ねんご はは むすこ さいかい うり

さて、チロリが残りました。生まれてから二年ほどたっていると、思われるチロリ
は、成犬になつていたために里親が見つかりません。そこで、私が引き取ることにし
ました。名前は「大木チロリ」、誕生日は私と同じ五月二十三日として役所に届け出
たのです。 せいけん なまえ おおき たんじうび わたし おな がつ にち やくしょ とど



きゅうしゅつ とうじ
救出した当時のチロリ。

アメリカのセラピードッグたちと訓練

チロリが住むことになった家は、千葉県松戸市にある私のケンネル（犬舎）でした。私はここで日本にセラピードッグを広める活動を始めようとしていたのです。すでに、このケンネルには私がアメリカから連れてきたセラピードッグが六頭ほど暮らしていました。アメリカでは、セラピードッグはラブラドル・レトリバーやシベリアン・ハスキーなど、限られた犬種になれるものとされていたのです。初めてケンネルの門からチロリを連れて入り、六頭の立派な大型犬に囲まれたとき、チロリはブルブルと震えて私から離れませんでした。この大きな犬たちの中で、脚に障がいを抱えた小さなチロリがやっていけるのか、私は心配でした。でも、それは杞憂にすぎませんでした。やがてチロリは、雑種犬のすばらしきを見せてくれることになるのです。

捨て犬だつたチロリは、人間に對しておびえがありました。私が抱くと、体を固くしてしまいます。信頼關係を作るために、私は自分のベッドに入れて一緒に寝ました。人間のベッドで寝ること、暖かな部屋で過ごすこと……。どれも経験がないチロリは、とまどつているようでした。

夜、チロリは私の布団の足元で寝ます。夜中に私が目を覚ましたとき、足元を見るとチロリはいつも起きています。私のちよつとした動きでも反応するほど、いつも氣を張つていたのです。チロリの寝顔を私が見られるようになったのは、かなりあとになつてからのことでした。

がんで闘病する大型犬ブラニガンに寄りそう

「セラピードッグには、優秀な犬しかなれない。」

これが当時の欧米の常識でした。私もそう思いこんでいました。だからこそ、日本

にセラピードッグを広める活動をするにあたり、アメリカから純血種の大型犬を日本に連れてきたのです。しかし、その考え方をくつがえすできごとが起こります。それは、チロリの取った行動によるものでした。

チロリがケネルに初めてやってきたとき、大型犬たちの中でただ一頭だけ、シッポを振ってチロリをやさしく迎え入れた犬がいました。シベリアン・ハスキーのブラニガンです。ブラニガンは、温厚で誰から也好かれる犬でした。チロリも心を許して、すぐに仲よくなりました。

ブラニガンはシベリアン・ハスキーとして全米チャンピオンにもなった犬でした。世界のドッグ・ショーに参加しながら、アメリカでは優秀なセラピードッグとして活躍していたのです。

ところが三年ほどたったころ、ブラニガンはがんを発症したのです。私は、あらゆる手を尽くして治療にあたりました。がん患部を切除する手術はうまくいったのですが、そののち再発と転移が続き、ブラニガンはつらく苦しい闘病生活を送ることに

なつたのです。そんなブラニガンにやさしく寄りそつたのが、チロリでした。

がんの再発さいはつと転移てんいのために、ブラニガンはだんだん衰弱すいじやくしていきました。

毎朝まいあさ、排便はいべんのために建物たてものの外そとに出るブラニガンにチロリは同行どうこうするようになりました。フラフラと脚あしを運はこぶブラニガンに合わせて、チロリはゆつくりと歩あるきます。がんの苦しくるしさに、ときおりブラニガンはうつむいて立ち止たどまつてしまします。そんなとき、チロリは数歩すうほ前まえに出て振ふり返かえり、

（もう少しすこしよ、がんばつて。）

と、ブラニガンを励はげますように見つめます。チロリの誘導ゆうどうのしかたは、まさに病人びょうにんやお年寄としよりのゆつくりした歩あゆみに合あわせて進すすむ、セラピードッグの歩行ほこうそのものでした。

チロリは、夜よるもブラニガンに添そい寝ねするようになりました。苦くるしい息いきのブラニガンを見みつめるチロリは、まるで寝ねたきりのお年寄としよりのベッドで添そい寝ねをするかのようにでした。

生まれ持った思いやりとやさしきで、チロリは訓練されたセラピードッグのようにふるまったのです。

「雑種犬でもセラピードッグになれるかもしれない」

チロリのブラニガンへの配慮は、とても細やかなものでした。それは、ケンネルに着いた日、ブラニガンだけが温かく迎え入れてくれたのを覚えていたからかもしれない。日に日に弱っていくブラニガンでしたが、表情はしだいにおだやかになっていきました。チロリがブラニガンに安らぎを与えていたのでしよう。いつぼう、チロリの眉間にはブラニガンを心配するかのようには深いしわが刻まれていったのです。

手術の四か月後、ブラニガンは永遠の眠りにつきました。亡くなる数時間前まで、チロリはブラニガンに寄りそいながら、つらそうに目を開き、眠ろうとはしませんでした。そして、ブラニガンが私の腕の中で息を引き取ったあと、チロリは震える私の

手をゆつくりやさしくなめて、悲しみに沈む私の心を癒やしたのです。

セラピードッグに必要なのは、弱い者に対する思いやりの心です。この素質がなければ、どんなに訓練を積んでも、介護を必要とするお年寄りや、体や心に苦しみを抱えた人に寄りそうことはできません。

チロリのブラニガンへのやさしさは、まさしくセラピードッグの行動そのものでした。このことがあつてから、私は、

「ほんとうに、セラピードッグは素質を持った限られた犬種しか出来ないのだろうか。雑種犬でも、すぐれたセラピードッグになれるのではないか。」

と、考えるようになりました。生まれたときからなに不自由なく大事に育てられてきた犬には、育ちのよさがある。けれども、つらい過去を経験し乗り越えた犬だからこそ、むしろ人の心の痛みを思いやることができるようになるかもしれない――。

私は「チロリをセラピードッグに育成してみよう」と心に決めました。

人のために尽くす社会貢献「ライフワーク」

ここで少し、私のアメリカでの活動についてお話しましょう。

チロリと私が出会ったのは、私が若いころに雇っていた結核の療養所の跡地でした。新しいべつの建物が建てられるまでのほんの少しのあいだ、子どもたちがチロリと子犬たちの世話をしていたのです。

私が療養所に入院していたころ、結核は死にいたる病だったという話はすでにしました。私は二年半もの入院のあいだに、

「もし病気が治って退院できたら、アメリカに行って大好きなブルースを歌いたい。」と願っていました。

ブルースは、アメリカで生まれた「黒人たちの悲しみを歌う」歌です。私は、もともと日本でブルースを歌う歌手をしていました。結核の療養中も、病室のベッドで

こつそり歌を作っていたのです。

さいわい病は癒えて、私は退院することができました。そして、念願かなって一九七六年春に、羽田空港からアメリカに向かつて旅立ちました。ロサンゼルスの人を頼り、そこを足がかりにしてステージ活動をしていったのです。じよじよに仕事が増え、ステージで歌う忙しい日々が続きました。

そんなある日、私は「ライフワーク」という言葉を知りました。アメリカでは、本業の仕事のほかに、どんな社会貢献をしているかが大切だということです。自分の収入にはならない、人のために尽くすボランティア活動といった社会貢献のことを「ライフワーク」というのです。とりわけ社会的に成功した人にはぜったいに必要で、アメリカでは「ライフワーク」をしていなければ人々から尊敬されません。

私はブルースを歌うことに精一杯で、自分が「ライフワーク」としての取り組みをしていないことに気づきました。

ちようどそんなとき、「セラピードッグ」という活動があることを知り、心惹かれたのです。もともと犬は大好きでしたし、子どものころに別れた愛犬への想いも背中を押してくれました。一九七七年のことです。

アメリカのセラピードッグ活動

近くの高齢者施設でセラピードッグが活動していると知り、さっそく私は見学に行きました。

高齢者施設では、緑のベストを着た犬たちが認知症や病気のお年寄りの中に入つて、心身のケアにあたっていました。お年寄りが犬の頭をなでたり抱いたりし、また、犬たちが車いすのお年寄りに寄りそつて歩いたりしています。お年寄りたちは笑顔で、心から犬たちの訪問を楽しんでいるようでした。

「犬つてすごい、これはいいなあ。」



アメリカのセラピー^{かつどう}ドッグ^{ようす}活動の様子。

大好きな犬を育てて、お年寄りや病氣の人を助けることができる。私はセラピー
ドッグの活動を、自分の「ライフワーク」にすることにしました。そのときから、時
間を見つけてはセラピードッグのいるお年寄りや障がいのある人のための施設を訪れ
るようになりました。ニューヨークには、セラピードッグの活動をしている小さなグ
ループがいくつもあり、それぞれの連絡も組織化されていました。
やがて自分でもセラピードッグを育てるようになり、自分が育てたセラピードッグ
を連れて施設に行き、お年寄りや病氣の人たちのために活動するようになりました。
お年寄りのいる施設、障がいのある人の施設、刑務所の訪問などにも取り組みまし
た。

ニューヨークから純血統のセラピードッグを導入

そのころ、日本ではまったくセラピードッグの存在は知られていませんでした。帰

国^{こく}するたびに病院^{びやういん}や福祉施設^{ふくししせつ}で説明^{せつめい}しても、よく理解^{りかい}してもらえません。実物^{じつぶつ}を見せ
たほうがわかりやすいと考え^{かんが}、一九八五年^{ねん}、アメリカで育成^{いくせい}したセラピードッグを見^み
せるため、日本^{にっぽん}に連れてきました。シベリアン・ハスキーやラブラドル・レトリ
バーなどの純血種^{じゅんけつしゅ}の大型犬^{おおがたけん}です。つてをたどつて病院^{びやういん}や高齢者施設^{こうれいしやしせつ}にセラピードッグ
と一緒^{いっしょ}に行くと、

「犬^{いぬ}を施設^{しせつ}に入れて大丈夫^{だいじょうぶ}なのか。」

「ベッドに犬^{いぬ}を入れるなんて。」

という反応^{はんのう}がほとんどです。ところが、実際^{じつさい}にお年寄り^{としよ}の前に犬^{いぬ}が進む^{すす}と、それまで
表情^{ひょうじょう}の乏^{とぼ}しかったお年寄り^{としよ}が手^てを伸ばしたり、笑顔^{えがお}を見せたりするようになることが
わかり、受け入^{うけい}れてもらえるようになりました。

一九九二年^{ねん}、自分の使命^{しめい}としてセラピードッグを日本^{にっぽん}に普及^{ふきゅう}させようと決心^{けっしん}し、
ニューヨークから一頭^{とう}のセラピードッグを連れてきました。純血統^{じゅんけつとう}のシベリアン・ハ
スキー、ダンです。いよいよ日本^{にっぽん}にケンネル^{けんしや}（犬舎）を建て^たて、本格的^{ほんかくてき}に活動^{かつどう}を始^{はじ}め

るためでした。

雑種犬チロリにセラピードッグの訓練を

チロリが仲間に加わったのは、ちょうどそんな時期でした。

私は、チロリにセラピードッグになるための訓練を始めました。初めのうちはすでにセラピー活動をしているほかの犬とはべつに、公園で朝、午後、夕方、夜の一日四回、それぞれ短い時間で行います。

セラピードッグになるためには、四十五教科の訓練をマスターする必要があります。この訓練法は、私がアメリカでセラピードッグの活動をしていた経験をもとに、誰にでもわかりやすくまとめたものでした。それまで系統だてたセラピードッグの訓練法はなかったのです。

・お年寄りや障がいのある人の歩くスピードに合わせて歩くこと。

・車くるまいすの人ひとを誘導ゆうどうすること。

・相手あいてが立たち止どまったら、じっと見みつめてもう少しすこ歩あるくのをうながすこと。

など……。

とりわけ、チロリの目めの力ちからは格別かくべつでした。大きな瞳ひとみでじっと見みつめられると、どうしても頭あたまをなでたくなってしまう。抱だきしめたくなります。そうして、意い思しを失うしなったかのような人ひとたちが手てを伸のばし、声こえを出だすようになっていきました。それほど愛情あいじょうの深い目めだったのです。

チロリは、私わたしが教おしえることを何なんでも必死ひつしにやろうとしました。後うしろ脚あしに障しょうがいがあるチロリは、たくさん歩あるくと、だんだん後うしろ脚あしを引きずるようになってしまいます。

「よくがんばったね。今日きょうはもうおしまいにしよう。」
と褒ほめると、うれしそうにシッポを振ふります。

（お父とうさんと生いきていこう。）

チロリはそう思おもい定さだめているようでした。

棒^{ぼう}で殴^{なぐ}られて生きてきたチロリ

ところが、チロリにはどうしてもできない訓練^{くんれん}がありました。

ある日^ひ、杖^{つえ}を突^ついた人^{ひと}に寄りそつて歩くトレ－ニングをしようとしたときのことです。

(棒^{ぼう}こわい！ いや！)

チロリは杖^{つえ}を見た^みとたんに震^{ふる}え上がり、その場^ばから逃^にげ出^だしてしまつたのです。

「ああ、そうだつたのか。」

私^{わたし}はようやく氣^きづきました。チロリの折^おれた左耳^{ひだりみみ}、まっすぐに座^{すわ}れないほど曲^まがつている後^{うし}ろ脚^{あし}……。それは、チロリが棒^{ぼう}で殴^{なぐ}られながら生^いきてきたためだつたのです。棒^{ぼう}の形^{かたち}がトラウマになつていたのです。

しかし、いずれは杖^{つえ}を突^ついたお年寄^{としよ}りや障^{しやう}がいがある人^{ひと}を助^{たす}けなければならぬこ

ともあるでしょう。杖つえを怖こわがっていては、セラピードッグとしての活動かつどうができません。

私わたしはチロリと寝ねるときに、杖つえをベッドの上に置おくようにしました。

「チロリ、これは杖つえといつて、お年寄としよりには必要ひつようなものなんだ。怖こわくなんかないよ。」
チロリは最初さいしよのうちはおびえていましたが、やがて杖つえがあつても眠ねむれるようになりました。

大型犬おおがたけんを従したがえてチロリが群むれのリーダーに

初期訓練しよきくんれんをがんばりぬいたチロリは、やがて大型犬おおがたけんにまざつてトレーニングするようになりましのうりまた。ここでチロリは、かくれていた能力はつきを発揮はつきしたのです。

ふだんはとてもおとなしいチロリ。ところが訓練くんれんが始はじまると、ガラリと変かわりまあしす。脚あしが短みじかく後うしろ脚あしも変形へんけいしているチロリは、初めはじのうちは大おおがたけん型犬けんたちに後うしろからつ

いていくのがやつとでした。大型犬おおがたけんの何倍なんばいも脚あしを動かさなければなりません。

ところがしばらくたつと、まわりの様子ようすを見きわめて、ほかの犬いぬよりもさつと前に出でるようになりました。そして、大きくて強い相手あいてには、先手せんてを打うつて「ウウーッ」と威嚇いかくします。大きなシベリアン・ハスキーに對たいしても、けつして逃げません。そのうちシベリアン・ハスキーたちもあきらめてしまい、いつの間まにかチロリが大型犬おおがたけんたちを引ひき連れて歩あるいているような格好かっこうになりました。チロリは群むれのリーダーになったのです。

でも、弱い者よわものや自分じぶんの味方みかたになる者ものには、細こまやかで深い愛情あいじょうを見みせます。そのやさしさは、まわりの人々ひとびとの心こころを温あたかくさせるものでした。

一九九六年ねん、チロリはすべての訓練くんれんを終おえ、日本育にっぽんそだちのセラピードッグ第一号だいいちごうになりました。訓練メニューくんれんメニューは四十五教科きょうかもあり、かなり優秀ゆうしゅうな犬いぬでもすべて習得しゅうとくするに二年半ねんはん、ふつうは三年以上ねんいじょうかかります。ところが、チロリはたった半年はんとしですべてマ

スターしてしまつたのです。

セラピードッグとなつたチロリは、たくさんの施設に繰り返し出かけていき、多くの人たちを励ましつづけました。

チロリとの出会いが人生の最期を豊かに彩る

いくつもの施設を訪問するなかで、チロリは冒頭でお話した洋食屋を営んでいた長谷川さんとも出会いました。チロリに助けられて少しずつ歩けるようになった長谷川さんは、杖を突いて部屋の中を歩き、トイレまで歩いていき、ついには施設の廊下を歩くまでになりました。家族の名前も思い出したのです。

歩いたあと、長谷川さんは疲れきつてベッドに倒れこみます。でも、表情は明るいのです。そして、チロリとの別れ際には、笑顔で決まつてこう大きな声で話しかけるのです。

「チロちゃん、ありがとう、ありがとう。かわいいな。また待つてるよ！」

やがて長谷川さんは、体調を崩して入院しました。体力が落ちて、厳しい状況になつていきます。長谷川さんは「チロりに会いたい。」と言いつづけました。集中治療室に入り、意識も薄れかけてもうじき亡くなるというとき、家族が長谷川さんにチロリの写真を見せ、

「お父さん、チロちゃんよ。」

と呼びかけました。すると驚いたことに、長谷川さんは全身の力を振りしぼるよう

に、「チロありがとう。会えてよかった……。」

と言つたのです。これが最期の言葉となりました。

長谷川さんの葬儀には、ご家族の希望でチロりも呼ばれました。棺の上で、チロりは眠っているかのような長谷川さんの顔を見つめ、棺から離れようとしませんでした。

スプーンで食事ができるまでに回復

なかざとえいこ
中里栄子さんは、発達障害を持つおばあさんでした。七十五歳のときに自宅で座布団につまずいて転び、背骨の神経が傷ついたために下半身不随になり、脚を動かすことができなくなっていました。リウマチも発症していて、手の指が曲がっています。初めてチロリに会ったときは、不安からかチロリをにらみつけていました。「いつになったら触れ合えるのだろうか」と、まわりの人たちは気をもみました。

脳の障がいがあるうえに、手足が不自由で、言葉もうまく出せない中里さんは、どれほどの苦勞をしてきたことでしょう。とりわけ両手は重いリウマチのために変形していて、恥ずかしそうに手をセーターでかくす姿は痛々しいものがありました。

チロリはあせらず、何度も中里さんのもとを訪問しました。チロリも中里さんの車の正面に置きたいすに座り、同じ目の高さから、いつもの大きな瞳で中里さんを

じつと見つめます。

(どうぞ、わたしをなでてください。)

と、言っているかのようです。チロリは相手の心からの笑顔を保っているのです。

何回も訪れているうちに、中里さんも心を許し始め、笑顔を見せるようになっていきました。

チロリに触つてみたい。中里さんのその気持ち、回復へのきっかけになりました。声を出そうとしながら、右手を動かし、チロリの頭をなでることから、リハビリはスタートしました。やがて数か月後、中里さんは震える手をチロリの頭にのせることができたのです。そして、手を大きく動かせるようになっていき、体を反らせながらチロリをなでるようになりました。

中里さんが体調を崩すと、チロリはベッドに入つて添い寝をします。フワフワして温かいチロリを抱きしめていると、中里さんの気持ちも落ち着くのでした。

「チロちゃん、チロちゃん。」



なかざとえい こ
中里栄子さんに寄りそうチロリ。

一生懸命チロリに話しかけようと声を上げながら手を動かす中里さんの姿に、まわりの人たちは驚きました。チロリはシッポを振り、体いっぱいに喜びを表します。中里さんがチロリを呼ぶ声はしだいに力強くなっていきました。そうして一年ほどたったところ、手を使えるようになった中里さんは自分でスプーンを持ち、プリンや水ようかんを口に運ぶことができるまでになったのです。思わず中里さんは大きな声でうれしさを表しました。

「おいしいー!」

胃ろうから栄養を取っていた中里さんは、もう何年も食べ物をお口にすることがなかったのです。胃ろうというのは、飲みこむのが難しい人などのおなかに穴を開けてチューブを通して、直接胃に栄養を入れる治療法です。ほんとうに久しぶりの食べ物の味は、さぞ格別だったこと



スプーンで食事を取る中里さん。

でしよう。

中里^{なかざと}さんは、チロリと触^ふれ合うこと^あで人^{ひと}と会^{かい}話^わできるようになり、表^{ひまじよう}情^{あか}が明^あるくならしました。目^めに力^{ちから}がやどり、感^{かん}情^{じよう}表^{ひよう}現^{げん}が豊^{ゆた}かになつていつたのです。チロリによるリハビリは、驚^{おどろ}くべき効^{こう}果^かをもたらししたのです。

「栄^{えい}子^こはチロちやんのおかげで幸^{しあ}せになりました。あんなに大^{おお}きな口^{くち}を開^あけて笑^{わら}えるようになつたのですから……。」

中里^{なかざと}さんのお姉^{ねえ}さん、千代^{ちよこ}子^こさんはそう言^いつてほほえみました。

いつも一緒^{いっしょ}のチロリとピース

二〇〇二年^{ねん}のある日^ひ、一頭^{とう}の雄^{おす}の犬^{いぬ}がやつてきました。ピースと名^なづけられたその犬^{いぬ}は、福岡^{ふくおか}の公^{こう}園^{えん}に捨^すてられていた犬^{いぬ}でした。温^{おん}厚^{こう}なピースを、チロリはとてもかわいがります。ピースもチロリになつき、なんでも真^ま似^ねをしていつも一^{いっ}緒^{しょ}にいました。

(チロちゃんのそばにいれば、安心！)

まるでそう思っているかのようでした。ふつうなら、犬はそれぞれの皿からご飯を食べて、ほかの犬が来たら怒って追い払います。ところが、チロリとピースは同じ皿から一緒にご飯を食べても平気なのです。

チロリのしぐさや考え方を、ピースはなんでも真似しました。悪いことをする者や、強い者には厳しく、弱い者にはやさしく接します。

機嫌のいいとき、チロリはピースの片耳をぺロリとなめます。ピースはそれが大好きでした。チロリはピースを息子のように愛していました。

おだやかなだけに、ピースは訓練にもとてもまじめに取り組みました。セラピードッグとしての訓練を終了してから、セラピー活動にもチロリとピースがチームで行くことが増えていきます。やがて、ピースはチロリのあとを継いでリーダーに育っていくことになります。



チロリになつくピース^{みぎ}（右）。

天国に行く前のアイコンタクト

やがて年月を重ね、チロリは歳を取ってだんだん弱っていきました。チロリのほんとうの年齢はわかりませんが、犬は人間の何倍も早く歳を取りますから、かなりの高齢になつていたはずですよ。

一九九九年には、目を手術。二〇〇三年には、虫歯を二本抜きました。翌年には、腫瘍を摘出。二〇〇五年十二月、左乳房にほんの小さなしこりが見つかりました。乳がんの末期、余命三か月と宣告されたのです。

手探りでがんを触るとき、チロリは私の顔を見つめながら、目じりにしわを寄せてつくり笑いをします。

(大丈夫よ、心配しないで！)

どんなときでも、チロリはまわりへの気配りを忘れませんでした。

最後のセラピー活動の日、それまで何度も訪れた東京都中央区の高齢者施設に行く
と、お年寄りの方たちが大きな拍手で迎えてくれました。それは心温まるシーンでし
た。

しかし、その後も、ほかの犬たちがセラピー活動に出かけようとすると、チロリは
がんのために血行障害でむくんだ脚を引きずって、

（わたしも行かなくちゃ。）

というように、みんなの後を追っていくのです。

「何でそんなにがんばるんだ、もういいんだよ。」

と、チロリの体を抱いて引き止めることもありました。

治療のために犬のがんセンターに行くときには、いつもピースが付きそうのでし
た。

二〇〇六年三月十六日、チロリは静かに天国に行きました。私の腕の中で息を引き取るとき、あのうるんだ大きな瞳で私を見つめ、
（ありがとう、お父さん。）
と言ったようでした。それが最後のアイコンタクトとなりました。

